

「教育する」ということの重大さをめぐって

長戸路 千 秋

教育が、人間性の伸長という角度からいって極めて重大であり、かつ、必須欠くべからざるものであるということについては誰でもまことに無造作に口にするとところであるが、では、なぜ重大であるのかと問いつめられると、いささか返答に窮するというのが実情ではないであろうか。

まず、「なんとなく大切なことに思えるから大切なのだ」というような調子では、教育の重大さの説明にはまるっきりなっていない。こうした説明は、いわゆる、同義反復にほかならず、すなわち、問いをもって問いに答えるたぐいの説明であって、決して実質的なものとはいえず、一種のゴマカシにすぎないものといわねばならない。私が敢てここで、このような極端な例を取り上げるのはほかではない。それは、これほど極端ではないにしても、これとはせいぜい「五十歩百歩」の違いしかないもろもろの、似たり寄ったりの説明がかえってくるのが普通だからである。

次に、これよりずっと掘り下げた説明として、「教育の目的は次代を育成することにある。この次代を立派に育成することとは、人間にとってもっとも大切なことの一つなのだ」ということになってくるとどうであろうか。ここに到れば、前の説明とは異なり、まことに堂々たるものになってきているといわねばならない。かなりまだ抽象的にすぎるとはいえ、一応筋の通った答えになってきているといえよう。なぜなら、人間にとって子孫を維持することとは、もっとも重大なことの一つであることは自明の理であるからである。

だが、私にとっては、これでは教育の重大さの説明としてはまだまだ、いわゆる、隔靴搔痒の感を免れず、人をして身も心も震撼させる程の、人

間にとっての教育の重要性、いや、その重要性の実質的な説明が、まだまだそっくり欠けているといわざるを得ない思いがするのである。

私は、教育の重大性を強調する実質的な理由として、まず次の二人の科学者の所論に着目したいと思う。その一人はアドルフ・ポルトマンであり、他の一人はティヤール・ド・シャルダンである。

アドルフ・ポルトマン (Adolf Portmann: Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen. 1951 岩波新書 高木正孝訳:『人間はどこまで動物か——新しい人間観のために——』1961) によれば、人間以外の高等哺乳動物の幼少期と人間のそれとを比較するとき、「母親や養護者のたすけなしには一日も生きていけない能なしの生まれたての人間」の子の姿、「不思議にもおそろしく未成熟で能なし」である人間の子の状態がひどく目立つ。これに対して、活発に走りまわっている子馬の姿や、生まれたての子猿が、すぐに手や足の強い握力で母親にしがみついて、母親が樹から樹へとびうつっても落ちない様子などをみせられると、一体これは何を意味するのであるかということが疑問になってくる。動物学的に厳密な、比較的・相対的な研究によれば、人間は他の動物、特に哺乳類に比較して、身体的諸機能からみて、その新生児が生まれた後1年たたなければほんとうの哺乳類の生まれたての子なみの状態に達しないことになるという。ポルトマン自身の言葉によれば、「人間の実際の妊娠期間は、われわれ人間の組織体制の段階にある典型的な哺乳類にしては、そうあるはずのものより、かなり短いものだ。この人間の誕生時の状態が、一種の生理的、つまり、通常化してしまった早産だということは、ほとんど異論がないだろう」(訳 p.62) というのである。

では、何が故のこの早産、人間の子の生まれたての時の未成熟さが人間につきまとうのであるか。一見それはまことに慨嘆に値いする未熟さに思えて、実はそうではなく、種々綿密な比較研究を進めてみると、これは別の特殊な理由に基いてそうになっているのだということがわかってくる、す

「教育する」ということの重大さをめぐって
なわち、その、「身体の未成熟さのために能なしなのではなく、哺乳類のうちでまったく独特な例外的な状態、まさしく人間の状態のために能なしなのだということを理解させてくれる」(訳 p.41) というのである。あるいは、いいかえれば、「これはわれわれ(人間)の誕生時の状態が、ただ単純な能なしというのではなく、意味の深い自由をかくしもっていることを、はやくも暗示している」(訳 p.34) のだというのである。さらに、ポルトマンのこの言葉を私流に敷衍することを許してもらえたとすれば、われわれ人間の子の誕生時の状態は、ただ単純な能なしというのではなく、意味の深い自由を、生後において(後天的に)展開させるために、いわば、あけてある未熟状態、すなわち、空白であり、不足であるということになるのである。

さて、もうここまでくると、人間の子のあの未成熟さ、あの不足、ないし、空白をわざと残して生まれてきた人間の、生後において展開される養育をも含めた意味での教育の重要性の主張が、自然科学的にも立証されたと同然であるということになるのである。そして更に、ここにおいて、何時のまにか物質的・身体的なものを越えて、それと不可分離的に結びついている精神的なものの世界の重要性を、間接的ながらも動物学が示唆してくれているものといえるのである。

実に今日の動物学が、人間の本質をついにここまで追いつめてきたものとして、私はこうした所説をまことに注目し値いするものと思うものである。

次に局面をかえて、もう一人の科学者テイヤール・ド・シャルダン(Teilhard de Chardin: Social Heredity and Progress. Études, April, 1945 The Future of Man. 1964 所収)によれば、自然科学的に見て(進化論の見地から)、生命の持つもっとも顕著な特徴の一つは、その「付加性」additive quality であるというところから彼は論議を進める。すなわち、生命は、それが先のものから受けついだところのものに、多かれ少なかれ絶えず何ものかを付

け加えながら繁殖していくものだというのである。しかも、「徐々により大きな自発性と意識へという一般的な方向をめざして」というのが彼の根本的な立場なのである（定向進化の立場）。

彼は、この‘additive quality’の展開過程の一環として「教育」（特に人間の）を見なければならないとする。何故に？それはほかではない。今日の遺伝学が、その対象があまりに微細であり過ぎ、問題の所在があまりにも奥まったところにあるため、今日まだ確実な結論を出し得ず、結局無視したままになっているところを、ひるがえって、人間のスケールにまで拡大されているが故に、その過程がわれわれにはっきりと見取ることができるものの「教育」の分野で、どのようなことが、この生命に普遍的にそなわっている‘additive quality’の具体的展開として起ってくるかに注目しようというのである。

結論的にいって、彼は「教育」をもって、「生命」に普遍的にそなわっている‘additive quality’が、みずからを展開していく過程における一つの不可欠の場面、すなわち、広い意味の遺伝作用の一部をなすものであって、これをより具体的に表現すれば、「生得的な遺伝」に対して、出生後の「社会的遺伝」 social heredity にあたるものだとするのである。

しかし、あるいはすると、これでもまだこうした断定はいささか唐突の感をいだかせるかもしれない。そこで、彼がこの結論に到る前提としてどのような考え方をしていたかをここに参考のためにつけ加えておくことが、彼のこの結論をより理解し易いものにするかもしれない。

それは極めて具体的な問題をめぐってのことではあるが、彼の念頭にはいつも次のような疑問が去来していた。すなわち、こうである。

そもそも、どの時点で「母親」なるものは、その子供を「生む」 engender といういとなみを「終止する」 cease ののであるか。それは母親がその子供を胎外に排出した時であるのか、それとも、胎外に排出して後初めて授乳した時であるのか、あるいは、その子供を離乳させた後に、その

「教育する」ということの重大さをめぐって

子供に喰べられるものを教え、みずからそれを獲得する方法を教えた時であるのか、という問題に関連してのことなのである。

彼はこれを「底意地の悪い問題」 insidious question だというのである。しかし何故これが「底意地の悪い問題」となってくるのであるか。それはほかではない。「現実」は、いわば、非連続の連続とでもいうべき形で動きに動いてやまぬものであるにかかわらず、人間が勝手にこれを分割して考えていこうとするため、その結果として、このような問題に直面すると、直ちにそこに「底意地の悪さ」を感じさせられてしまうということになるのだという考え方をするのである。ここにおいて、彼はベルグソンを引用して、胎生の過程において有機的決定を受ける領域と自発性の領域とを峻別しようとする常識の勝手さを指摘することになるのである。彼はこの意味において、生得の遺伝と後天的なそれへの付加とを総合して広義の遺伝とし、この後者にあたる「教育」をもって「社会的遺伝」だといひ切ることになったのである。

かくて、ただ胎外に排出することだけをもって「生んだ」とはいえない。遺伝は胎外に排出された時に母親から与えられた生得的な遺伝に加えて誕生後の教育（社会的遺伝）による漸次的付加がなされなければ、人間は一人前の人間とはなり得ないことを強調するのである。

この意味で、ティヤール・ド・シャルダン¹は、この「社会的遺伝」 social heredity という概念をもって、特に人間における教育の重要性、その本質的不可欠性を強調する科学者の一人として、特にわれわれの注目をひく人となってくるのである。

さて、以上アドルフ・ポルトマンとティヤール・ド・シャルダンの所説をめぐって不十分ながら彼らがいわんとしていると思われることの概略をたどってみたが、何にせよそのことがらが重大であるだけに、今一度その要点をくりかえせば次のようになるであろう。

まず、A・ポルトマンによれば、人間は人間となるために、他の哺乳類

の動物とは非常に異った独自のリズムをもってその生命を展開する。まず人間は、他の哺乳類の動物とはちがって、その一般的・身体的機能からみて相対的に約1ケ年ばかり早い一種の早産の状態です。母胎から排出され、その後において約1ケ年の間にそのおくれをとりかえして他の哺乳類の新生児の状態にまで追いつくようになっており、しかもまた出生と同時に、人間の名に値するものにまで成長させていくための「付加物」すなわち、養育をも含めた意味での教育が始められなければならないように創り出されている。否、むしろそのようにさせるための早産であるというのである。

他方、ティヤール・ド・シャルダンがポルトマンとはまた別の、彼独自の巨視的立場から、遺伝の過程を、出生のとき母親から直接に受けた生得的な遺伝と、出生後、すなわち、後天的に人間関係（特に親子関係、ひいては社会関係）から受けとるものを漸次獲得し、「付加」してその人間性を成長させていく過程（教育）とを綜合したものとしての広い意味でとらえ、この後者（教育）をもって社会的遺伝と呼んで出生後の教育の重大性を強調する立場をとっているのである。いいかえれば、「教育」という人間の営みを、特に、人間が人間となるために、人間にとって本質的なもの、そしてそれだけに絶対に不可欠なものであり、人間はこれによって単に過去から伝えられたものだけに止まることなく、その意識性をますます高め、かつ、その自発性にみがきをかけて行き、また行かねばならないように創られている存在だというのである。以上これを要するに、この二人の科学者の所説は相より相まって、はからずも教育の人間にとっての重大性を科学的に立証するに余りある程の結論を導き出してくれているものといわねばならない。私が教育の重要性を論ずるに当って、とりあえず特にこの二人の科学者の学説を引き合いに出すのはこの理由によってである。

以下、これまで述べてきたこれら二人の科学者の所説をふまえて教育の重要性についての私の考えを極度に切りつめた形でつけ加えておきたいと思う。さて、以上のようにして、全く未熟な、いわば、早産の人間が、今

「教育する」ということの重大さをめぐって日の、この動物界に君臨するような地位を獲得するに到ったその秘密は、まさにこの「教育」にあったといえるのである。他の哺乳動物とくらべて、はるかに頼りない不完全な状態で生まれてきたその子供を、生まれてきた後に、養育をも含めた意味での「家庭教育」の過程で、さらに、それに引き続く「幼児教育」、「初等教育」、さらには、中学校での……、高等学校での……という風に、真に願わしい人間に仕立て上げるための「教育」のいとなみの中で、そのいちじるしい「不足分」を「補充」し、いや、単に補充のみにとどまらず、それを越えた、より洗煉されたものにしていくということになるのである。

ここに、人間において「教育」の持つ怖ろしい程の重要さがのぞき出してくる根源があるのである。この生まれた後における（後天的な）教育こそ、あらゆる動物中（特にわれわれ人間と比較し易い哺乳動物中）もっとも未熟な状態で生まれてきた不足だらけで不完全な人間の子をして、より成熟した状態で生まれてきた他の動物（特に哺乳類）の子に追いつき、追い越し、ついには断然引き離して、いわゆる「万物の靈長」たらしめたまさにそのものなのである。

そしてまたここに、特に、家庭教育、ならびにこれと併行しながらまもなく始まる義務教育というような、人間にとってもっとも基礎的な教育の営みが持つ、おそろしいほどの重大さがのぞき出しているといえるのである。

これをたとえていえば、そもそも堅実な基礎工事を怠って家が立派に建つであろうか。また、基礎がひん曲っていて建造物は安全といえるであろうか。この意味で、家庭教育や義務教育、すなわち、人間を人間にするための基礎教育が、人間にとって如何に重大をきわめるものであるかということがはっきりとわかる。いや、わからなければならないはずである。まず家庭における父母の教育が、やがてそれと併行しながら始まる小学校や中学校における義務教育が、人間が人間によって人間となるための基盤のほとんどすべてを決定してしまうといつてよいわけである。しかもそれは

子供が幼なければ幼いほどその子供の性格形成の基礎を構成するものとして強くそのあとをとどめていくものである。「三つ子のたましい百まで」ということわざは、まさにこの事情をみごとにいいあてているものといわなければならない。

この角度から見て、この段階においての父母や教育者たちは、ちょうど芸術家のような立場に身を置いているものといえるのであって、まさに「未熟」で「不足だらけ」の状態で生まれてきている子供を素材として、傑作をつくり出すこともできれば、駄作にしてしまうこともできるわけである。いや、もっと痛烈なたとえをもってすれば、立派な製品に仕立て上げることもできれば、また、どうにもならぬ欠陥製品にしてしまうこともできるわけである。

この意味で、この時期における教育は、一種の創作活動（しかも人間にとってもっとも重大なそれ）ともいえる性格を特に多分に内在させているといえるのであって、ここに、「親次第」、「先生次第」、あるいは「教育次第」などという言葉がおどろくほどその真実性を発揮してくることになるのである。

このようにして、「教育」という人間の営みは、特に人間において重大を極めるものである。われわれは、親としても教育者としても、この営みの前にもっとも襟を正さなければならないといわねばならない。特に、この自覚を十分にもって教育するか否かによって、人類の未来の運命をになう真の教育となるか、それとも通り一遍の形だけの教育になり終るかの質的なちがいが出てくることを思えばなおさらのことといわねばならない。

以上が「教育の重大性」ということについての私の信条である。教育というまことに大きな問題を、このように短い文章で述べつくすことはとうてい不可能であることは十分承知の上であるが、その重大性のポイントだけはこれでいいつくせたのではないかと思う。

「教育する」ということの重大さをめぐって
ところみに、以上私が述べたような観点に立って、今一度次のような、
先人たちが残していった教育の重要性についての立言を味わいなおしても
らいたいと思う。おそらく今までわれわれが何気なく無造作に読みすごし
てきたよりも、より深い意味がそこからひびき出てきて、われわれを圧倒
するものがあるはずである。まことに古人おそろべしといわねばならぬ。

われわれは、政治的なボスや貴族のようなものなしでも何とかやっていくこ
とはできるが、学校（教育）なしではどうにもならない。なぜなら、学校（教
育）は世界を支配していかなければならないものだからである。

——ルター，テーブルトーク——

われわれ人間が生まれてきたとき持っていなかったすべてのもの。われわれ
人間が人間の領域にはいつてきたとき必要となるすべてのもの。それらはすべ
て教育が与えるものである。

——ルソー，エミール——

教育の目的は、機械をつくることではなく、人間をつくることにある。

——ルソー，エミール——

人間は教育によってのみ人間となることができる。人間は、教育が人間から
作り出したものにほかならない。ここで注意しなければならないことは、人間
は人間によってのみ教育されるということ、しかもかつて同じように教育され
た人間によってのみ教育されるということである。したがって、若干の人びと
に対する訓練や教授に欠陥があれば、それらの人びとはまたその生徒たちにと
って悪い教育者になるのである。

——カント，教育学——